

多義語コロケーションの研究：日本語教育での多義語派生義習得研究への応用を目指して

麻生，迪子
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

志水，俊広
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際文化学講座

<https://doi.org/10.15017/7148436>

出版情報：言語科学. 46, pp.121-132, 2011-03-17. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



多義語コロケーションの研究

—日本語教育での多義語派生義習得研究への応用を目指して—

麻生迪子¹・志水俊広

1 はじめに

日本語における多義語習得研究は、麻生(2011)が指摘するように、多義語がもつ複数の意味のうち、どの意味が習得しやすいのか、またどの意味が習得ににくいのか、という研究課題を明らかにすることに焦点が置かれてきた。これまでの研究によると、第一義をプロトタイプの意味であると認定するならば、第一言語と第二言語におけるプロトタイプの意味が正の転移により習得されやすいという結論で一致している。今後の研究の方向性として、第二義、第三義といった派生義の習得や学習法の研究が望まれる。しかしながら、「語」とは、単独でその使用が規定されるわけでない。ネーション(2005)が定義する語彙知識を踏まえるならば、「どのような語と一緒に使うか」、つまり「コロケーションの知識」によってその使用が規定される。たとえ「語の意味」を習得したとしても、「コロケーションの知識」がなければ、「語の使用」が難しいということが予測される。受容や産出といった「語の使用」(ネーション(2005)は use と表記)につながらず多義語派生義の習得や学習についての研究を進めるためには、「多義語のコロケーション」について整理する必要がある。そこで本稿では、多義語とコロケーションの定義について述べ、多義語がコロケーション体系においてどのように位置づけられているのかを考察する。そして、日本語における多義語コロケーションの特徴について記述し、その特徴から第二言語習得研究への応用を検討する。

2 多義語の定義

本稿における多義語とは、「異なった二つ以上の意味を持っている」語と定義する(辻, 2000)。辻(2000)は see と bank の例をあげて説明している。see は「見る」「理解する」「経験する」などの複数の意味を持っているが、複数の意味の間には関連があり、see は多義語である。一方、bank も「銀行」「川岸」という複数の意味を持っているが、複数の意味の間には関連が見出しにくい。この場合、bank は同音異義語となる。このように多義語は、一つの語に関連のある複数の意味を持っているが、関連性は、身体性とイメージという認知的な基盤に基づいた比喩的拡張により生じる。多義語のコロケーションを考えた場合、字義通りの意味とともに比喩的な意味を持っているコロケーションと考えることができるだろう。

¹ 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

3 コロケーションの知識

では、「コロケーション」とはどのような現象を指すのだろうか。ネーション(2005)が述べる「コロケーション」とは、「単語を句や文節の形にグルーピングする」(p. 370)という緩やかな定義である。「どのような語と一緒に使うか」という知識は、ネーションによると、『語彙の知識』の中の『コロケーションの知識』である」という(p. 30)。コロケーションの知識は以下のように記述されている。

receptive knowledge: What words or types of words occurs with this one ?

productive knowledge: What words or types of words must we use with this one ?

ネーション(2005, p. 30)

ネーション(2005)によると、受容面のコロケーションの知識とは、「この語がどのような語と一緒に使われるのか」という知識であり、産出面のコロケーションの知識とは、「この語はどのような語と一緒に使われなければならないか」という知識である(p. 30)。

3. 1 日本語における多義語コロケーション分類の定義

ネーション(2005)の定義は、いささか緩やかであるが、英語学や言語学ではコロケーションの定義について、Ellis (2001), Pawley and Syder (1983), Sinclair (1997)などが考察を行ってきた。彼らの論点は、コロケーション知識の定義とともにコロケーション知識が言語使用にどのように影響を与えているかについてである。そして、Moon (1997)は、Sinclair (1997)のコロケーションの定義をもとに、コロケーションの分類、コーパスを用いた出現頻度、テキストにおけるコロケーションの機能、第二言語での教育といった観点からこれまでの先行研究をまとめた。一方、日本語におけるコロケーション研究は、主として、連語、慣用句、慣用表現という領域で行われており、コロケーションの定義や分類という観点から行われてきた(森田, 1966; 宮地, 1982, 1985; 国広, 1985, 1997; 粕山, 1997, 2002)。この節では、日本語におけるコロケーションの定義を行うとともに、多義語を用いたコロケーションがどのように位置づけられているのか、そして多義語を用いたコロケーションの分類について検討する。

まず、森田(1966)は、「慣用的な言い方」もしくは「慣用表現」について考察を行った。森田は、「焼く」を例にとり、「焼く」という語が特定の語と結びつくことにより、「焼く」が本来もつ意味とは全く別の新しい意味(例:「胸を焼く」「手を焼く」「世話を焼く」)を慣用として成り立たせる、と述べる。森田があげる「焼く」の例は、「多義語」にあたり、本義とは異なる意味が生じる現象は意味拡張に該当すると筆者は考えるが、森田はその点について言及はしていない。森田が慣用表現として挙げているものは以下の5種類である。

1. あいさつ語・応答語 (例: おはようございます、ありがとうございます、など)
2. 慣用化された特定の言い回し (例: ~して余りがある、~は争われない、など)
3. 慣用化された文語表現 (例: あに図らんや、有り得べからざる、など)

4. 叙述の語が慣用として固定しているもの（例：汗をかく、涙を流す、よだれを出す、
など）
5. 比喩が慣用化したもの（例：油を売る、さばを読む、腹が立つ、合点がいく、
鼻が高い、など）

（森田, 1966, pp. 71-75 より）

多義語が関連していると考えられるのは、4、5の例であろう。森田(1966)は、多義語が研究目的ではないので、多義語の意味拡張について言及はしていない。

次に、宮地(1985)は、「句」を以下のように分類している。

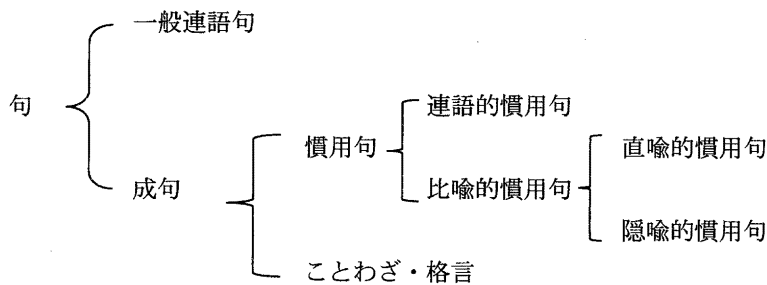


図1 宮地(1985)による句の分類

宮地(1985, p. 63)より抜粋。一部改変。原文では縦書きであるが、本稿では横書きの図に筆者が変更した。

宮地(1985)は、「一般連語」とは、「二語（以上）が、意味関係のゆるすかぎり、自由に結合してできる句」であるという(p. 63)。例えば、「雲が流れる、花をながめる、山にのぼる、空が青い」などである。次に、「連語的慣用句」であるが、「その結合に制約があって、慣用が固定的であるうえ、比喩的慣用句ほどには全体的に派生の意味を持たない句」と述べている(宮地, 1985, p. 63)。例えば、「汗をかく、うそをつく、風邪をひく、気をきかせる」などである。「比喩的慣用句」は、「比較的是っきりとした比喩的意味をもつもの」である(宮地, 1982, p. 238)。さらに、「比喩的慣用句」は、「直喩的慣用句」「隠喩的慣用句」という2種類に分けられる。「直喩的慣用句」について、宮地(1982)は、厳密な定義を立てることは困難であると述べてつも、「典型的には、『～(の) ような』『～(の) 思い』などを伴って、比喩表現を明示するもの」と述べている(p. 239)。「赤子の手をひねるよう」「断腸の思い」などがあげられる。そして、「～(の) ような」「～(の) 思い」という言葉を使わないものもあり、そういったものは、「隠喩的慣用句」につながるという。そして「隠喩的慣用句」とは、「語句の意味が派生的・象徴的になっていて、全体として比喩的な意味をあらわすに至っている慣用句」である(宮地, 1982, p. 240)。例として、「肩を持つ」「手を焼く」などがあげられる。「隠喩的慣用句」は、原義の意味が生きておらず、「味方する」「もてあます」という慣用句の意味が生じている。このように宮地(1982, 1985)の分類には、「比喩的慣用句」という比喩について言及されているが、意味拡張の観点から、宮地(1982, 1985)の分類を見ると、「連

語的慣用句」にも比喩が含まれている。例えば、「汗をかく」ならば、「かく」の字義的な意味が消失しており、これは、比喩的な意味拡張に該当するものと考えられる。宮地の分類は、彼自身が述べているように、「一般連語句」と「連語的慣用句」の間の境界線は明確ではない。そして、「連語的慣用句」と「比喩的慣用句」の間の境界線は明確ではなく、両者にまたがる表現（例：「口をきく」）もある（宮地, 1985, p. 63）。意味拡張の観点から見れば、再分類が必要と考えられる。

さらに、国広(1985)は、コロケーションを連結の固定度と意味の固定度の観点から①語連結、②連語、③慣用句という3つに分けている。宮地(1982, 1985)はことわざや格言を「慣用句」とは別に分類しているが、国広(1985)はことわざや格言も含めた上で句を分類した。以下の表では、連結の固定度と意味の固定度がみられるものを「+」で表記した。

表1 連結の固定度と意味の固定度

	語連結	連語	慣用句
連結		+	+
意味			+

国広(1985, p. 6)より抜粋

原文では縦書きの表であるが、本稿では横書きの表に筆者が変更した。

国広(1985)によると、「固定度には、連語・慣用句それぞれの内部でさまざまな度合いが認められ、三者は連続体をなしている」という(p. 6)。国広が述べる各定義をまとめると以下のようになる。

語連結：単なる語の連結。

連語：二語以上の連結使用が、構成語の意味ではなく慣用により決まっているもので、全体の意味は構成語の個々の意味から理解できるもの。

慣用句：二語以上の連結的使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和からは出て来ないもの。

「語連結」とは、従来の国語学で述べられている連語の概念に相当し、「単なる語の連結」である。それに対して、「連語」には、連結的固定度があり、意味的に結びつきがある。つまり、連語全体の意味は個々の意味からすぐ分かるという。国広(1985)は、「傘をさす」を例に説明を行っている。例えば、「傘をさす」という行為を描写する場合、「傘をかざす」と言える可能性もあるが、「さす」を用いる。「かざす」のほうが意味的に透明性が高いと思われるが、「傘の軸が空をさす形になる」ため「さす」が用いられるという。従って、「傘」「さす」には意味的な関連が存在しており、個々の単語から連語の意味が理解できる。しかしながら、なぜ、「かざす」の代わりに「さす」を用いる言い方のほうが固定しているかは不明である。つまり、「かさ」と「さす」の間の結びつきに固定性があると言えよう。「慣用句」に至っては、意味の面、結びつきの面から固定されている。例として、「駄目を押す」をあげよう。「駄目を押す」の意味は、「わかりきったことを、念のために

更にたしかめる」という意味であるが(新村編, 2008)、「駄目」と「押す」には意味的な関係はなく、固定されている。加えて「駄目を押す」の意味は「駄目」と「押す」から導くことはできず、「念のためにさらに確かめる」という意味は固定されている。国広(1985)があげる「語連結」「連語」「慣用句」というコロケーションの分類は非常に明解であるが、意味拡張の観点からの分類ではない。しかしながら、続く粕山(1997, 2002)が、「連語」と「慣用句」の意味拡張の観点を取り入れた分類を行っている。

粕山(1997, 2002)は、国広(1985)の「語連結」「連語」「慣用句」というコロケーションの分類を踏まえ、意味と結びつきの両面から連語と慣用句について違いを述べている。意味拡張の面からの連語と慣用句の違いは、次のように記述される。

連語：構成する語レベルから意味の拡張がみられる。

慣用句：句レベルで意味の拡張がみられる。

粕山(2002, pp. 121-124)をもとに筆者作成

例えば、連語「手が足りない＝仕事などをする人が十分ではない」を例にとると、この「手」は、＜部分で全体を表す＞というメトニミーから生じた＜（仕事などをする）人＞という意味に転用されている。＜（仕事などをする）人＞という意味に「足りない」という意味が重なり、「手が足りない＝仕事などをする人が十分ではない」と解釈ができる。一方、慣用句であるが、慣用句「頭を抱える」は、「頭を抱える」という字義通りの意味からその時の精神状態を示すという＜二つの時間の共起＞のメトニミーにより比喩的意味が生じているものを考えられる。意味拡張経路を明確にできる粕山の定義は、多義語の多義構造を明らかにできるものと考えられる。粕山のコロケーション分類の定義は、多義語を用いたコロケーション習得研究に有効であると考えられる。国広(1985)と粕山(1997, 2002)をもとにしてコロケーションを分類し定義しなおすと、以下のようになる。

語連結：単なる語の連結。

連語：二語以上の連結使用が、構成語の意味ではなく慣用により決まっている。

全体の意味は句構成語の意味から導くことができる。

慣用句：複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連結の一部でない時に持つ意味の総和から導き出せないもの。

3. 2 多義語コロケーションの特徴と体系的分類

多義語コロケーション分類の定義は、粕山(1997, 2002)の定義に従うが、「連語」「慣用句」の認定法とさらなる下位分類について詳細に述べる。粕山(2002)は、「慣用句の結びつきの固定性」について宮地(1982)を参考にし、論を展開している。以下の特徴は、慣用句のみにみられる制約であると粕山は断言していないが、慣用句なのか連語なのか判別がつきにくいものに対して判断テストとしての機能を持つと筆者は考える。

- ① 他の要素が入りにくい
- ② 「名詞（句）＋助詞＋動詞」から動詞が名詞を修飾する構造にしにくい
- ③ 構成語を関連語（類義語、反義語、対応する敬語）で言い換えにくい
- ④ 否定形のみで用いられる

靱山(2002, p. 124)より抜粋

①についてであるが、「骨を折る」「実を結ぶ」を例に取り説明を行う。次の例文が示すように「骨を折る」と「実を結ぶ」の間には他の要素が入ることができない²。

- (1) a. Aさんが我々のために一生懸命骨を折ってくれた。
- b. ×Aさんが我々のために骨を一生懸命折ってくれた。
- (2) a. Bさんの研究は見事に実を結んだ。
- b. ×Bさんの研究は実を見事に結んだ。

靱山(2002)は、「慣用句のこの種の制約は、修飾要素が慣用句中の特定の要素のみを修飾し、その特定の要素に対して語として持っている意味（慣用句中ではなく普通に使われている意味）に解釈することを強いるため」だと述べている(p. 125)。つまり、慣用句「骨を折る」「実を結ぶ」は、「骨を折る」「実を結ぶ」という一まとまりで、意味解釈されているものと考えられる。

次に②の制約であるが、次の例文(3)～(4)は、名詞修飾節を作ることが難しい。

- (3) a. Aさんの態度にみんなが腹を立てた。
- b. ×Aさんの態度にみんなが立てた腹
- (4) a. （この問題の処置は）Aさんに下駄を預けた。
- b. ×Aさんに預けた下駄
- (5) a. （花子が）雑誌を買った。
- b. （花子が）買った雑誌

(5)は、普通の句を含む文であるのに対し、(3)、(4)は慣用句を含む文である。(3)、(4)の例から、慣用句は構成要素が決まった順で並んでいなければならないということがわかる。靱山(2002)は、(3b)、(4b)が不自然となる要因を、「腹」「下駄」を中心とする名詞句となり、その結果、「腹」を「ある種の腹」と解釈せざる得なくなり、「下駄」に関しては、「履物」として解釈せざる得なくなったためであると述べている。

次に③であるが、「慣用句中の構成語は、類義語、反義語、対応する敬語に言い換えがしにくい」

² (9d)を除く(1)～(10)は靱山(2002, pp. 125-129)の例文を抜粋したものである。(9d)は筆者が作成した。「×」表記は靱山(2002)による。

ということである(粕山, 2002, p. 127)。次の例を見てみよう。

- (6) a. 道草を食う。
b. ×道草を食べる。
- (7) a. 鼻が高い。
b. ×鼻が低い。
- (8) a. 頭に来る。
b. ×頭にいらっしゃる。
- (9) a. 本を買う。
b. 本を購入する。
c. 本を売る。
d. 本をお買いになる。

(6)～(8)の例は、「慣用句中の構成語は、類義語、反義語、対応する敬語に言い換えがしにくい」ということを示している。それに対して普通の句(9)は、類義語、反義語、対応する敬語に言い換えができてるのがわかる。

最後に④であるが、慣用句には以下のように否定形のみで用いられるものもある。以下がその例である。(10)の例には、肯定形は用いられない。

- (10) うだつが上がらない／開いた口が塞がらない／二の句がつけない／歯に衣をつけない

上記のテストで、慣用句と認定されるものは、粕山(1997)において体系的に整理されている。粕山(1997)は「慣用句」とするものを次の表2のように整理している。

表2 舩山(1997)による慣用句の分類

構成語の意味の総和としての意味が成立しない	意味不明語を含む：あっけにとられる	
	解釈不能：世話をやく、腹が立つ	
構成語の意味の総和としての意味が成立する	構成語の意味の総和としての意味から比喩に基づき慣用的意味が成立	A. 隠喩に基づく：足を洗う B. 換喩に基づく：頭を抱える C. 提喩に基づく：煮え湯を飲ませる D. 二つの種類の比喩の複合に基づく ①「換喩+隠喩」に基づく：舵をとる ②「換喩+提喩」に基づく：軍配があがる
	構成語の意味の総和としての意味と慣用的意味の比喩に基づく関連が不能	手を焼く／油を売る

舩山(1997, pp. 42-43)より抜粋

原文では縦書きであるが、本稿では横書きの表に筆者が変更した。

3. 3 多義語コロケーションの多義性

コロケーションを「単語を句や文節の形にグルーピングする」と定義したとき(ネーション, 2005, p. 370)、日本語においては、コロケーション体系は「語連結」「連語」「慣用句」という分類のもとで記述整理されてきた。ここでは、これまでのコロケーション体系の研究を踏まえ、派生義を用いた多義語コロケーション学習研究への足掛かりとなる研究をあげていく。国広(1985)は、「連結」「慣用句」の「結びつき」の固定性について詳細な説明は行っていないが、レイコフ・ジョンソン(1986)、レイコフ(1987)、舩山(2005)、瀬戸(2008)などは認知意味論の枠組みで「固定性」について有益な説明を与えている。「連語」と「慣用句」が字義的な意味と比喩的な意味を有することについて、レイコフ・ジョンソン(1986)、レイコフ(1987)は、「概念メタファー説」によって説明を試みた。彼らによると、メタファーとは、2つの意味領域間の写像(mapping)であると述べる。例えば、「目に入る」の場合、字義的な意味は「目に物が入る」であるが、比喩的な意味として「自然に目に見える」がある。この場合、「視界は容器」という概念メタファーが存在しており、「境界が定められた物理的な空間＝視界」を「容器」に見立てているのである。「概念メタファー」の考え方によって、一貫性を持ってメタファー表現を整理することが可能になった。田中(2002)は、身体部位詞「口」を使った「連語」「慣用句」を対象にメタファーやメトニミーを用いて包括的な記述を行った。続く田中(2003)は、「怒り」といった精神的作用を表す身体詞を用

いた表現について分析を行い、身体部分が「怒り」の概念と結びついていることを指摘している。馬場(2001, 2002)も身体部位を用いた表現「腹が立つ」などの分析を行っている。

テイラー・瀬戸(2010)によると、「概念メタファー」は、メタファー表現のスキーマとして位置づけられるという。彼らは、「A CONCLUSION IS A DESTINATION³ (結論は目的地だ)」という概念メタファーと「We arrived at the conclusion.」という具体的なメタファーとの関係を以下の図2に示した。ただし、これらの考えに問題がないわけではない。例えば、上位レベルでの概念メタファー間の関係は、必ずしもスキーマと事例の関係に限定しないという例外や概念メタファーの表示の問題などがある。

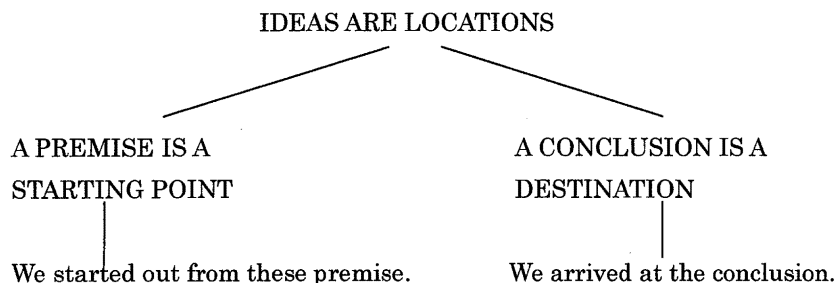


図2 概念メタファーとスキーマ

テイラー・瀬戸(2010, p. 300, 図 13.1)を一部改変した。

多義性をレイコフ・ジョンソン(1986)、レイコフ(1987)のように領域間の写像(mapping)として捉えるのではなく、事物間によってとらえる流れもある。松本(2000)は、日本語における身体表現がどのように意味拡張しているのかを分析した。有蘭(2005)は、「連語」と「慣用句」を意味拡張の観点から6つ(①メタファーに基づく慣用句、②メトニミーに基づく慣用句、③メトニミーとメタファーに基づく慣用句、④メトニミーとシネクドキに基づく慣用句、⑤名詞と動詞(あるいは形容詞)が意味拡張した慣用的連結句、⑥名詞のみが意味拡張した慣用的連結句)に分け、「手」「口」を使った表現を対象に意味拡張の分類を行った。有蘭(2009)は、日本語における身体表現を使った慣用表現⁴について認知言語学の観点から詳細に分析を行っている。そもそも語の「多義性」は、レイコフ・ジョンソン(1986)、レイコフ(1987)、粉山(2005)、瀬戸(2008)など認知意味論の枠組みで論じられ、第二言語習得論に応用されてきた。Kellerman (1972), Tanaka and Abe (1984), Shirai (1995)は、カテゴリーにおけるプロトタイプ性の転移について考察を行ってきた。「連語」「慣用句」の多義性も同様にレイコフ・ジョンソン(1986)、レイコフ(1987)、瀬戸(2008)の枠組みで論じ、その考察を第二言語習得研究に生かせる可能性がある。Gibbs and O'Brien (1990)は、「概念メタファー」が英語イディオム理解に影響を与えるのか検討した⁵。Gibbs

³ 原文に従い、概念メタファーは大文字表記にした。

⁴ 有蘭(2008)における「慣用表現」は本稿における「連語」「慣用句」を含んだものである。

⁵ Gibbs and O'Brien (1990)には記述がないが、句の意味の総和では意味を導くことができないことから、本稿

and O'Brien は、母語話者がどのようなイディオムの心的イメージをもっているか調査を行い、その結果は被験者の心的イメージは非常に整合性のあるものだった。彼らは、概念メタファーはイディオム理解に何らかのかかわりがあると主張した。

4 多義語コロケーション習得研究への応用

派生義を用いた多義語コロケーションは、小野・小林・長谷川(2009, 2010)などにより日本語教育にも取り上げられているが、その指導の有効性を実証した研究は少ない。しかしながら、三好(2007, 2010)が「連語⁶」の指導について提案している。三好(2007, 2010)は、実験参加者の未知語を対象語彙として、①語の意味を考える指導(三好 2007)と、②語と共起する語の範疇を考える指導(三好, 2010)について検討している。その結果、①と②の指導法の有効性が実証された。三好(2007, 2010)は、多義語派生義のコロケーションに限定してはいないが、多義語派生義の指導にも有効である可能性がある。今後、多義語派生義にも有効かどうか実証を行う必要があるだろう。

一方、「慣用句」に関する研究は、日本語と外国語との対照研究にとどまっている(星, 1976; 宮地, 1982; 林, 2002; 李, 2007; 長谷川, 2008)。星(1976)は、身体語彙を使った慣用句を例に取り、諸外国語に比べ日本語には身体語彙を使った慣用句が多いのではないかと述べている。次に、宮地(1982)は、辞典形式で慣用句の意味を記述し、英語、フランス語、中国語、韓国語、タイ語といった他言語ではどのような表現になるのかを記述している。そして、林(2002)や李(2007)は、韓国語と日本語の身体語彙を用いた慣用句を比べ、その意味記述を行っている。今後は、対照研究の成果をもとに、日本語学習者の慣用句の習得についての研究が望まれる。

5 まとめ

以上のように、日本語における多義語を用いたコロケーション研究を概観してきた。日本語におけるコロケーションをどのように分類するか、分類基準とは何か、ということについては、各研究者間にある程度の一致が見られるものの、習得の実証研究にまでは至っていない。今後は、多義性の記述を進め、習得研究への応用を試みたい。

参考文献

- 麻生迪子(2011). 「日本語における多義語習得研究概観」『比較社会文化研究』, 29, 1-8. 九州大学大学院比較社会文化学府
- 有蘭智美(2005). 「身体部位(『手』、『口』)を含む慣用表現の意味分類」『日本認知言語学会論文集』, 5, 487-497.
- 有蘭智美(2009). 『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文(未刊行, 要旨)

の分類における「慣用句」に該当すると考えらえる。

⁶ 三好(2007, 2010)は、コロケーション体系のうち、「自由結合」つまり「語連結」を取り扱っている。

- 李明玉(2007).『日本語と韓国語の慣用表現の差異—比較言語文化学の立場から』笠間書房
- 小野正樹・小林典子・長谷川守寿(2009).『コロケーションで増やす表現—ほんきの日本語 Vol. 1』くろしお出版
- 小野正樹・小林典子・長谷川守寿(2010).『コロケーションで増やす表現—ほんきの日本語 Vol. 2』くろしお出版
- ギブス, R. W. (2008).『比喩と認知—心とことばの認知科学—』辻幸夫・井上逸平(監訳) 小野 滋・出原健一・八木健太郎(訳) 研究社
- 国広哲弥(1985).「慣用句論」『日本語学』, 4, 4-14.
- 国広哲弥(1997).『理想の国語辞典』大修館書店
- 新村出(編)(2008).『広辞苑(第六版)』岩波書店
- 瀬戸賢一(2009).「メタファーと多義語の記述」楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』, 31-61. ひつじ書房
- 田中聰子(2002).「『口』の慣用表現—メタファーとメトニミーの相互作用—」『言語と文化』, 3, 5-20. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 田中聰子(2003).「心としての身体—慣用表現から見た頭・腹・胸—」『言語文化論集』, 24, 111-124. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 田中茂範(2008).「意味記述におけるコアの有効性と英語教育における応用可能性」日英言語文化研究会(編)『日英の言語・文化・教育—多様な視座を求めて』, 159-169. 大修館書店
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一(2006).『英語感覚が身に付く実践的指導—コアとチャンクの活用 法—』大修館書店
- 辻幸夫(編)(2002).『認知言語学キーワード辞典』研究社
- テイラー, J. R.・瀬戸賢一(2008).『認知文法のエッセンス』大修館書店
- ネーション, I. S. P. (2005).『英語教師のためのボキャブラリーラーニング』吉田晴世・三根浩(訳) 松柏社
- 林八龍(2002).『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究』明治書院
- 長谷川修治(2008).「英語のイディオムと日本語の慣用句に使用される身体語彙の計量的比較分析」日英言語文化研究会(編)『日英の言語・文化・教育—多様な視座を求めて』, 181-190. 大修館書店
- 馬場典子(2001).「怒りの直接表出表現『ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク』の意味分析」『世界の日本語教育(日本語教育論集)』, 11, 195-207.
- 馬場典子(2002).「『腹が立つ』の動機付けに関する一考察」『言語と文化』, 3, 31-44. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 星命(1976).「身体語彙による表現」『日本語講座 第4巻 日本語の語彙と表現』, 154-180. 大修館書店
- 松田文子(2004).『日本語複合動詞の習得研究—意味論による意味分析を通して』 ひつじ書房
- 松本曜(2000).「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張—その性質と制約」坂原茂(編)『認知言語学の発展』, 317-343. ひつじ書房

- 三好裕子(2007). 「連語による語彙指導の有効性の検討」『日本語教育』, 134, 80-89.
- 三好裕子(2010). 「連語による中級動詞の指導—動詞と共起する語の範疇を考えさせる方法—」
『2010 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 135-140.
- 宮地裕(1982). 『慣用句の意味と用法』明治書院
- 宮地裕(1985). 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』, 4, 62-75.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫(2003). 『英語語彙の語彙指導マニュアル』大修館書店
- 粉山洋介(1997). 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』, 80, 29-43. 名古屋大学国語国文学会
- 粉山洋介(2002). 『認知意味論のしくみ』研究社
- 粉山洋介・深田智(2005). 「意味の拡張」松本曜(編)『認知意味論』, 73-133. 大修館書店
- 森田義行(1966). 「慣用的な言い方」『講座日本語教育』第二分冊, 61-78. 早稲田大学語学教育研究所
- レイコフ, G. (1993). 『認知意味論—言語からみた人間の心』池上嘉彦・河上誓作(訳) 紀伊国屋出版
- レイコフ, G.・ジョンソン, M. (1986). 『レトリックと人生』渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳) 大修館書店
- Ellis, N. (2000). Memory for language. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and second language instruction* (pp. 33-68). Cambridge University Press.
- Gibbs, R. W. & O'Brien, J. E. (1990). Idioms and mental imagery: The metaphorical motivation for idiomatic meaning. *Cognition*, 36, 35-68.
- Kellerman, E. (1979). Transfer and non-transfer: Where we are now. *Studies in Second Language Acquisition*, 2, 33-59.
- Moon, R. (1997). Vocabulary connections : Multi-word items in English. In N. Schmitt & M. McCarthy (Eds.). *Vocabulary description, acquisition and pedagogy* (pp. 40-63). Cambridge University Press.
- Pawley, A. and Syder, F. H. (1983). Two puzzles for linguistic theory: Nativelike selection and nativelike fluency. In J. C. Richards & R.W. Schmidt (Eds.). *Language and communication* (pp. 191-225). Longman.
- Shirai, Y. (1995). The acquisition of the basic verb PUT by Japanese EFL learners: Prototype and transfer. 『語学教育研究論叢』12, 61-92. 大東文化大学
- Sinclair, J. (1991). *Corpus Concordance Collocation*. Oxford University Press.
- Tanaka, S & Abe, H. (1984) Condition on interlingual semantic transfer. *On TESOL '84. A Brave New World for TESOL*, 101-120.